

- 1 満たされぬままの林檎が置いてある
- 2 山粧ひて旧石器時代かな
- 3 およそ秋の絵にはあらずや秋団扇
- 4 無花果を割りて原始の空のあり
- 5 白樺派同人の選る草の花
- 6 引き返す径にくれなる真弓の実
- 7 天高く馬肥ゆる日の大壁画
- 8 更待の夜の間違ひ電話かな
- 9 夜長していづこへ遷都したらむと
- 10 赤き水筒青き水筒茸山
- 11 とんちんと金屋子神の木の実落つ
- 12 山盛りのコーンフレーク震災忌
- 13 粧へる山に入りたる測量士
- 14 鯖雲の空うめつくす逃避行
- 15 鯛の死光る生鮮食料品
- 16 足名椎(あしなづち) 手名椎(てなづち) の踏む煙茸
- 17 振り向き様に漆黒の初冬かな
- 18 外套の見知らぬ人となりにけり
- 19 眠れずに枯鶏頭の立ち尽くす
- 20 枯野ゆく遊牧の民鉄の民
- 21 弥生土器つなぎ合はせてゆく冬野
- 22 白鳥の白新しく来たりけり
- 23 焚火跡つつき大陸移動説
- 24 空のこと考へてゐる冬木立
- 25 暖房の水族館の珊瑚かな
- 26 絨毯に腹話術師の大鞆
- 27 足元にタレースの水涸れ残る
- 28 おでんの具深呼吸してをりにけり
- 29 ひと部屋にひと日暮らすや寒椿
- 30 この中のひとりは鶴となりにけり
- 31 ごつた返して東京の神無月
- 32 三人のヨブの友らのマスクして
- 33 ざわざわと源平合戦図の屏風
- 34 神の旅いろいろ貼つてある手帳
- 35 障子白く鎮護国家のごとく貼る
- 36 田の径に大きな石あり鎌鼬
- 37 マンホールの蓋どつしりと社会鍋
- 38 五百阿羅漢ぬくぬくと冬籠
- 39 冬の蠅銀鉱石を含みゐる
- 40 初夢の喫茶店より始まりぬ
- 41 客席へ役者飛び込む義仲忌
- 42 描かれし星を見上げて初芝居
- 43 湖にくづほれてゆく朝霞
- 44 空遠く椿の坂を下りけり
- 45 城の鬼門の淡雪に濡れてゐる
- 46 春泥の重く囲むや王の墓
- 47 春シヨールまばたきをするそのときに
- 48 水玉を散らし白鳥帰りけり
- 49 大木を神話の国へ流しけり
- 50 春の山に梯子を架けてみんとする

- 51 フラスコの中にゐるなり花粉症  
52 フェーン吹くコロツケ入れし紙袋  
53 とんがつてゐるものもあり春帽子  
54 木の椅子の固くありたる大試験  
55 橋あらば橋わたるべし花の客  
56 芝居がかりて富士山の笑ひけり  
57 大きすぎる亀鳴く声の大きすぎる  
58 会ひたくて蝶がいくつもいくつも飛び  
59 つちふるやメリーゴーランドの電飾  
60 野遊の野をダイニングテーブルに  
61 逃水に落として仕舞ふ電車賃  
62 ポタージュ混ぜて春遅々と春遅々と  
63 舟唄を北窓開けて迎へけり  
64 土深く黄泉醜女(よもつしこめ)の目借時  
65 錦丸新栄丸や風光る  
66 石鹼玉ミノタウルの迷宮に  
67 子規堂の腹いつぱいの椿かな  
68 春天に石落ちてくる穴がある  
69 鱗あり鱗あり鱗ありにけり  
70 うろ覚えなる鞆のある広場  
71 一文字空けて改行をして白蓮  
72 溜池の幾つもあるや健吉忌  
73 鈴蘭の空想の音響きけり  
74 小満やみつちり詰めて爪楊枝  
75 村ひとつ瓦葺きなり鑑真忌
- 76 摩訶般若波羅蜜多心経衣更  
77 神籤よりお多福出でて桐の花  
78 妖怪に名の一つつつ竹落葉  
79 三重之塔に住みたる蝸牛  
80 石段の石のひとつは墓  
81 バナナむき妖怪の国神の国  
82 革表紙のイングラント史儂美しく  
83 なめくちの進みし跡の美文なる  
84 呪術師のうすばかげろふ放ちけり  
85 ぬるぬると山椒魚の不服かな  
86 海に動くは船虫と黒船と  
87 恋をしてゐる夜濯の音がする  
88 まくなぎやここに集まる切支丹  
89 くらぐると明朝体の昼寝かな  
90 炎昼や畑の中に人がゐる  
91 隧道の大暑に穴をあけてゐる  
92 水中りして仏陀伝読み了へる  
93 ライオンの像ライオンのまま晩夏  
94 雷を十二神将とりかこむ  
95 騙されてもいい大西日の綺麗  
96 竹林を海亀のゆく心地かな  
97 あれは全部嘘だつたんだ揚花火  
98 木槿垣真昼に暗き部屋のあり  
99 新豆腐水に浮かびて触れ合はず  
100 寝返りを打つかもしれぬ榎檀かな